病膏肓（やまいこうこう）に入る

札幌市医師会
宮の森病院
村上嶽四郎

ことわざ辞典（岩波）で「病（やまい）」を引くと４個ある。

１　病治りて薬忘る。
２　病は気から。
３　病は口から入り　禍（わざわい）は口から出る。
４　病膏肓（こうこう）に入る。

いずれも読んで字の如しで、意義も分かり易い。ただ４については問題があり、誤読と誤解釈が慣用されている。広辞苑には膏肓の正しい読みは「こうこう」であり、「こうもう」と読むのは誤読に基づく慣用読みであるとなっている。慣用読みは曲者で、早急は「そうきゅう」、固執は「こしゅう」が昨今では一般的となり、誤読の方が幅を利かせて用いられている。病膏肓（こうもう）に入るの誤読と共に誤解釈による一般的な慣用の使い方は、物事に熱中するあまり周囲の状況や物事を客観的に見られなくなった人を「あの人は病気だ」「病が膏肓に入った」「恋は盲目」といった使い方である。趣味や道楽（恋も）に夢中になり、病み付きになった人には「痘痕（あばた）も笑窪（えくぼ）」に見え、膏薬や盲目の連想が付きまとい、付ける薬がない、といった意味合いに用いている。近頃では噂の皇族の秋篠宮真子様が正にそれに当てはまるかもしれない。

「病膏肓に入る」はBC450年頃の中国の書「春秋左氏伝（成公10年）」の故事を語源とする（中国故事物語辞典）。晋の景公が重病になり当代の名医秦の緩を呼ぶこととなった。待つ間に景公が夢を見た。二人の童子に姿を変えた病魔が夢枕に立ち何やら相談していた。「彼は名医なり。何処かに逃げ隠れないと」と「膏と肓に隠れれば名医からでも逃げられる」「そうだ、あそこは安全だ。そうしよう」と。果たして名医緩が来りて診察し言った。「病は不治である。病魔は膏肓に在り、鍼で到達せしめても効果及ばず、薬も到達せず、灸で攻めるも有効でない」と。景公は夢に出た病魔が既に膏肓に入って不治となり余命幾ばくも無いと診断を下した緩を名医と褒め称えた。その予言通り、景公は新麦の季節を待たずに亡くなった。「病膏肓に入る」とは不治で余命幾ばくも無いとの故事である。

さて、それでは膏肓とは身体のどの部分、どの臓器のことを指しているのか。手元の新小辞林（三省堂）には、「膏肓」読みは「こうこう」であり、体内の最も奥深く病気の治し難い部分。「膏」は胸骨の下の脂肪組織。「肓」は胸と腹の間の薄膜即ち横隔膜とあった。

現代の解剖学の教科書には、もちろん「肓肓」の文字は無い。ちなみにわが国最古の解剖学書である約200年前の「解體新書」（安永３年　杉田玄白　前野良沢らがオランダ語の「ターヘル・アナトミア」を漢語訳書として出した）を調べてみたが「肓肓」の文字は無い。紀元前の古典に出てくる「膏肓」なる名称を持つ解剖学上の組織は現代に残る学術書の上では確認できないのかとも思った。が、閃いて開いた東洋医学書の中の経絡学の項に見つけ出した。

ツボ（経絡穴）の名称の一つに用いられていた。これは膏肓に入った病に挑戦する為の鍼灸のツボであり、第４第５胸椎棘突起間の外３寸肩甲骨内縁と記されている。適応症には気管支炎、肺結核、喘息、胸膜炎、狭心症などとある。更に決定的なのは、英文で書かれた経絡学実技書の「Ryodoraku Acupuncture（山下九三夫著）」である。膏肓は中国語で膏肓（Kaohuang）、ラテン語でCor et Pericardium（心臓と心外膜）となっていた。

これで、ようやく「膏肓」の正解にたどり着いた。病魔の入り込んだ膏肓とは心臓Corと心外膜（心嚢）Pericardiumであり、ここに病魔が達したら不治で余命幾ばくも無いという解釈が正解であった。

現代以前は世界共通に感染症が死亡原因の第１位で、中でも結核が不治の病として癆痎（ろうがい）と称され恐れられていた。ストレプトマイシンを先駆として優秀な抗結核薬が続々と開発されつつあった時代。それは、正に私の医学生から若い修行時代に重なるが、喀血を伴う新鮮な肺結核も療養所（ほとんどは国道市立の結核療養所で、少数は私立の病院）ではまだ診れた時代であった。肺結核から湿性胸膜炎となり、多量の血性浸出液が胸膜腔に貯留する例は稀ではなかった。これと同時に、結核性心嚢炎も併発し心嚢液が貯留して心タンポナーデを起こす症例も見られた。これらがドレナージと抗結核薬によって治癒せしめることが可能となったのである。ただ、この心嚢炎の治癒型によっては心嚢の全周が石灰化でガチガチに収縮し、いわゆる収縮性心膜炎として心臓の拡張障害から循環不全を引き起こす新たな疾病を生じさせた。

また、梅毒も恐れられた。トレポネーマは大動脈内膜から筋層に進み、胸部や腹部の大動脈瘤の形成原因となったり、更に心臓では心内膜炎へと波及し大動脈弁を侵し狭窄や閉鎖不全をきたし心不全を惹起する。

結核や梅毒の他にも種々な感染原が心嚢に入り込み、化膿性心膜炎（心嚢炎）を起こしたり、敗血症では心臓に入り、感染性心内膜炎を起こす。私どもは優れた抗生物質を持つとはいえ、これら心内膜炎、心外膜炎が現在でも難治性の病気であることを認めざるを得ない。病が膏肓に入れば、現代でもやはり死に至る可能性があり、難治性で重症である。故に、この故事は現代にも生きていると言えるのではないか。